

日本バプテスト看護専門学校特別講義報告書

講義科目：アート・コミュニケーション
講師：伊達隆洋(京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター研究員)

対象者：日本バプテスト看護専門学校 2 年生 24 名

講義時間：計 4 回 8 時間

講義日程：

第 1 回：2009 年 11 月 10 日 イントロダクション、「聴く、応答する」ワークショップ

第 2 回：2009 年 11 月 13 日 「みる、伝える」ワークショップ

第 3 回：2009 年 11 月 24 日 「グループでの鑑賞」ワークショップ

第 4 回：2009 年 11 月 26 日 「グループでの鑑賞」ワークショップ(内容変更) 講義

概要：

日本バプテスト看護専門学校にて、看護師を志す学生へのトレーニングの一環として、ACOP の手法を用いた全 4 回のプログラムを行った。医療領域におけるアートというと、アートセラピー(芸術療法)やホスピタル・アートなどが思い浮かぶが、今回の試みは看護士育成のプログラムにアート鑑賞を用いるというものである。

ナイチンゲールによれば、看護とは「新しい芸術」かつ「新しい科学」であり、「単なる技術のみならず人格なのである」ということになる。事実、看護が対象とするのは医学上の疾患のみならず、疾患を抱える

患者その人であり、その射程は疾患をも含めた、人との関わり全般に及ぶものである。昨今、EBM (Evidence-Based Medicine、根拠に基づいた医療)が叫ばれ、医療(cure)の客観性・普遍性が重視される潮流があるが、一方で、患者その人との関わり(care)における特殊性・個別性が見落とされ、医療現場でのコミュニケーション力不足などが指摘されることも多い。

この cure と care の関係は、technique と art の関係と重なる。これらはどちらも「技術」を表す言葉であるが、technique は、technology (科学技術)という言葉からもわかるように、使う人・対象を問わない普遍的な技術を指し、一方の art には、技芸やコツといった、それを使う人や対象によってその現れ方が変わるような個別性・特殊性が含まれている。「看護技術」は英訳すると nursing art となる。先の「人格」という言葉が示すように、看護とは技術や方法論のみではなく、それを用いる、あるいは用いられる人をも含んだ現象であるということになる。

ACOP では、アートを、作品と鑑賞者との間に立ち上がる個別性をも含んだコミュニケーションという現象として捉えてきた。この点で、ACOP と看護における art に変わるところはない。そして、こうした原理論のみならず、対話型の鑑賞における他者とのコミュニケーションや、作品をみることにおける「根拠に基づく意識的な観察」といった実践は、そのまま看護の現場において必要とされるものにもつながる実践で

ある。今回の連携は、ACOP の試みが、看護をはじめとする対人援助の領域においても寄与しうる可能性の一端を示すものとなった。

実施内容：

第 1 回の授業では、イントロダクションとして、アートとコミュニケーション、看護の関係についての講義と、会話をを用いた 1 対 1 でのコミュニケーション・ワークを行った。これは、今後の対話型で行う鑑賞ための導入でもあるが、加えて、対人援助の場面において聞かれる「受容」「共感」「傾聴」ということが、一般に、ただ受身になって相手の言葉に同意し聞き入れることだと誤解されがちであるため、このワークショップでは、話し心地、聴き心地、応答のし心地・され心地に意識を払いながら、会話における聞き手の能動的関与の重要性を認識してもらい、「聴く」ということがどうということなのかを考えてもらった。

第 2 回はアート作品を使い、自分が目にしたものを言語化し、それを他者に伝えるための記述にするというワークを行った。このワークは、

- 1.) 観察によって情報を得る
- 2.) 自分が観察によって得たものを、伝える相手に応じてどのように記述するかを考える
- 3.) 記述を読み合わせることで、同じ対象の観察でも人によって得ている情報が違うことを知り、観察には自らの関与が含まれることを知る
- 4.) 観察によって情報を得る際のプロセスやその特徴を顧みることで、自らの関与の特性を認識する

といったことが狙いであり、これらは臨床におけるアセスメント（見立て）や記録などの能力に関わるトレーニングでもある。

第 3 回では、「みる、考える、話す、きく」という、より総合的な要素を備えたワークとして ACOP で行っているグループでの作品鑑賞を行った。クラス全体で 1 つの作品をみて話していくというワークは、臨床に置き換えれば、1 人の患者に医療チームで関わる際の諸状況をどのように実践するかというワークでもある。同じ対象について各自の視点から読み取ったものを、具体的な根拠を示しつつ互いに共有・検討していくことで、より包括的な対象像を生み出していく能力を身につけることは、チームでの臨床実践やカンファレンスを行っていく上で欠かせないものである。

第 4 回も引き続きグループでの鑑賞を行う予定であったが、第 1 回より、受講生からの自発的な発言がみられず、自分の意見を話すことに強い抵抗感を持っている様子であったため、急遽、内容を変更し「話せない / 話さない / 話したくない」ということについて話し合うワークを行った。学生が語った自分の考えを話すことへの不安や拒否感、事情について扱うとともに、それらを臨床でも起こりうる様々な事態と想定し、そういった感情でさえ否認せずに臨床場面に活かし得る可能性についての講義もあわせて行った。

受講生レポート抜粋：

- ・「絵画や様々な作品をみることは、この作品がつけられた背景はどのようなものか？作った人物像は？その作品に込められた意図は？など想像することができて、

実に楽しく思う。実際の患者さんに対しても、上記のように思いをめぐらせることが大切なのだと感じることができた。」

・「今回のアートを通してのコミュニケーションは興味深かったです。一枚の絵をみても、全ての人の見方が異なること、似た見方をしても 100%同じ人はいなかったことが改めて知ったことでした。これからチーム医療をしていく上で、一人の患者さんを、多面的な角度からとらえていく勉強にもなりました。自分の見方も客観的に知ることができたように思います。患者さんの見方に対しても、自分の意見を決めつけず、多角的な観察、アプローチから本来の患者さんの像へと近づけるのだらうと思いました。」

・「授業を受けて、自分の考え方、とらえ方を他の人の意見を聞くことで知ることができました。発言することで客観的に捉えることができました。患者（対象）を知るには、まず自分を知っていないと、深く知ることはできないと感じました。」

・「今回の授業で、アートをみて自分の抱いた感情を共有するということが初めて体験しました。実際に体験してみて、自分の思っていた感情とは正反対の感情を抱いている人や、同じような感情を抱く人など、一つのアートから様々な感情が生まれてくることを知りました。そして、この事実を知ることができたのは、コミュニケーションを通して互いに自分の感情を客観視し、言葉にして共有したからだと思います。看護の場においても、ひ

とりの患者さんに対して複数の看護師がそれぞれ違う解釈してその患者さんの心理を捉えていたとしたら、統一された看護を行うことができず、患者さんが混乱してしまうことになると思います。そうならないためにも、看護師間での情報や自分の感情を共有していくことが大切だと思います。そして何よりも、患者さんとの信頼関係を土台としたコミュニケーションを通して、表面にはあらわれない心の底の思いを察知し、患者 - 看護師間で共有していくことが大切だと思います。」

今後に向けて：

ACOP がこれまで鑑賞能力育成のために行ってきた手法は、一見かけ離れた領域に見える看護（に限らずあらゆる対人援助職）での臨床場面に必要となる能力の育成として置き換えたとき、その重なりは驚くほど大きい。しかし、どちらも本質的には他者とのコミュニケーションであり、そこで求められる能力の育成を行っているという点では当然ともいえる。ナイチンゲールは、看護に必要なものは観察だけだとも述べ、観察の訓練の必要性を強調している。「“ 観 ” 察」「“ 看 ” 護」「“ 診 ” 察」これらはすべて「みる」という漢字である。ACOP が提唱してきた「みる」力の育成とは、主体的・能動的に対象に関わりながら、体系的に考える力の育成であり、対人援助職における客観性と個別性、そのどちらをも含んだ関わりの基礎体力育成として広く寄与できるものと思われる。

今回は試験的に全 4 回の特別講義を行っ

たが、こうした能力の育成は短期間で行うには限界もあり、持続的・継続的に行われることが望ましい。本年度の試みの結果、日本バプテスト看護専門学校から、来年度以降の、より持続的なトレーニングが可能な形での連携の要請を頂いている。今後こうした連携を行っていくには、共同授業といった継続的な連携のあり方を検討していく必要があるだろう。また、今後、他の対人援助領域においてもACOP展開といった寄与の展望も考えられるのではないだろうか。